

(3)

□

□
月 □

(172) × 23 × 7 081

(4)

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

(344) × 34 × 3 019

(2)と(3)は直接接続しないが、同一木簡の断片である可能性がある。
(4)は習書であろうか。

(山本博利・秋枝 芳)

「大伴」「夫」の墨書土器多数出土

—兵庫県教育委員会『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘報告書』

一九八五年に兵庫県文化財調査報告書第三十冊として出版された。同書によると、七点の「大伴」、一点の「夫」、その他「椋垣」「殿」などの墨書土器が出土している。「大伴」は平城宮、多賀城、姫路市辻井遺跡でみつかっているという。土器はいずれも奈良時代のもの。

本文編(本文二四八頁・図版七二図) 図版編(一〇七図)。

申込先 神戸市中央区下山手通四丁目十六番三号

兵庫県文化協会 頒価 一一〇〇〇円

兵庫・長尾沖田遺跡

ながおきた

1

所在地

兵庫県佐用郡佐用町佐用・長尾

2

調査期間

一九八五年(昭60)五月～八月

3

発掘機関

兵庫県教育委員会

4

調査担当者

大平 茂・村上賢治

5

遺跡の種類

集落跡・寺院関連遺跡

6

遺跡の年代

弥生時代中期～古墳時代前期、奈良時代後半～平安時代

安時代

7

遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡の所在する佐用町は、播磨の西北端に位置し、歴史的・地理的に古来から交通の要衝

(美作路・因幡路)である。

遺跡は、千種川支流の佐

用川右岸、標高約一一〇m

の台地上に立地している。

また同台地西には、白鳳時

代の創建と考えられる長尾

廃寺の塔心礎が残存する。

調査は、県土木道路改良



(佐用)

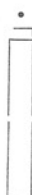
事業に伴う事前調査で、一九八三年に続く第二次全面調査である。

木簡と関連する遺構には、平安時代初頭の直線道路（現存長一七〇m、幅約三・五mでさらに北に延びるよう）とそれに付設された溝（幅約一・五m、深さ約三〇cm）がある。道路上面は、礫及び一部瓦片（長尾廃寺のもの）を敷き、低湿地部では丸太材を横にならべ、その上を河原石と土砂で被って構築している。

木簡は、低湿地部の道路西側溝から、多数の木製品・木片と共に出土した。その他出土遺物は、「川辺」「中殿」と記す墨書土器二点、斎串四点、木製鋤模造品一点、馬歯などがある。

8 木簡の积文・内容

(1) ・「奴□□□每里



(288) × (45) × 3 019

(2) 天マ×



(60) × (16) × 5 081

(1)・(2)ともわずかに墨痕が残るのみで、肉眼判読は不可能である。判読は、奈良国立文化財研究所鬼頭清明氏の御教示による。

9 関係文献

兵庫県教育委員会『長尾沖田遺跡現地説明会資料』（一九八五年）
同『ひょうこの遺跡 7号』（一九八五年）

（大平 茂）

兵庫・但馬国府推定地

- 1 所在地 兵庫県城崎郡日高町松岡・水上・土居
- 2 調査期間 一九八五年（昭60）一〇月～一九八六年三月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 吉識雅仁・山田清朝
- 5 遺跡の種類 官衙跡
- 6 遺跡の年代 平安時代初頭～鎌倉時代前半
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

但馬国府は『日本後紀』延暦二三年正月壬寅（二六日）条に、「遷但馬国治於気多郡高田郷」とあることから、移転されたことがわかる。現在までに国府の推定地として、新旧含めて六カ所があげられている。その内「八丁路説」による推定地に、日高バイパスの建設が計画されたため、今回調査を実施した。この推定地は円山川左岸の沖積地に位置し、今回の調査区は、



（出 石）

位置し、今回の調査区は、